



# さやかとアンナ



～出会い～

春日信彦

今は23世紀

ロボットが管理する学園都市

会話が得意なロボット 会話が苦手な人間

一秒のくるいもなく、拓也を迎えに来るグリーンのロボットシャトルバス

大きなため息

今日も、拓也はこのバスに乗る

目の前には、ファッションモデルのような女学生たちの白い肌

いつものように、美女ロボット運転手近くに立つ拓也

流れる景色 毎日同じ

拓也の耳に飛び込んでくる

テンポの速い女学生たちのラブソング

背の高いブロンドの美男子が飛び乗ってくる

フランス人の母を持つ青い目の精神科医

拓也の日課のひとつ

彼のラブストーリーを聞くこと

テーマは「愛の偏差値」

関 拓也（セキ タクヤ）は、白百合文芸女子大学教授（数学者）、年は45歳。バツイチ。外見は四角い顔に眼鏡をかけた短足おじさん。血液型はエッチB型。星座は乙女座。好きな食べ物はチョコレート。ペットはロボ・シャムネコ、名前はミーシャ（寂しいときの話し相手）。趣味はカラオケとミッキーグッズの収集。あだ名は、オカマッチ。

女学生の間では、あだ名で呼び捨て。オカマッチの語源は、オカマティーチャー。略して、オカマッチ。ついでに、ドクターはホモッチ。森はエロッチ。

あだ名の事を拓也に教えたのは、杏子という女学生。

彼女は、解答用紙の余白に”親愛なるオカマッチへ”と数学の問題は解かず、拓也へ肉感的なラブレターを書いた。

拓也は少しムカついたが、リアリティーにとんだ文章にけっこう興奮

（将来、杏子はエロ小説家になるつもり？）

ドクターは、白百合文芸女子大学に赴任して3年目。彼は、20代で精神医学のグローバルライセンスと博士号を取得した医学博士。

常識的に考えると、彼は、世界的に最も権威のあるドイツのリーマン大学で教鞭をとるべきだが、なぜか、偏差値の低い女子大の心理学講師。

さやかの話によると、ドクターは、この大学に来る前、父親が経営している安部精神病院に勤務していたとのこと。

彼は今年の8月で37歳。いまだ独身。

さやかは、安部精神病院の看護師。

彼女は、20歳の時からドクターとつき合っているらしい

（8年ほど、つき合っているらしいが、本当なのか、嘘なのかははっきりしない）。

今年で、彼女は28歳？。

彼女は、童顔で小柄。見た目は女子高生。

また、服装からはまったく看護師に見えない。

拓也と会うときは、いつも、黄色のジーパンに、

チェス盤と駒がプリントされたTシャツ。

靴はピンクのスニーカー。

化粧は、薄いピンクのルージュとパールアイシャドーだけ。

拓也のミステリーガールフレンド。

100億のクラシック電子ブック&アニメをそろえたブックセンターと  
10万点の絵画&1億のバーチャルミュージアムが見られるアートセンターは、  
ブルーの18階建て双子ビル。

世界のどこからでもアクセスできるとても便利なセンター。

その隣が拓也を待ち受けているお嬢様大学。

うわさによると、芸能人の子息がかなり在籍しているらしい。

もうそろそろ見えてくる。

バスが止まる。

ドクターは、拓也を置いて真っ先に飛び出していく。

拓也は、ゆったりと研究室に向かう。

女学生たちによる無料のファッションショーを眺めながら。

数学が悪いのか、数学を好きになった拓也が悪いのか、

拓也は、とことん女性にもてない。

それに比べ、ドクターの講義には、ロックシンガーのコンサート会場と

思わせるほど、どこからともなく女学生が集まってくる。

さらに、ドクターのサインがほしいのか、キャーキャーと研究室にまで押しかける

(はっきり言って、うらやましい)。

ただ不可解なのは、時々、ドクターは研究室に押しかけた女学生を

怒鳴ったり、追い返したりしている(女性が嫌いなのか?)。

数学者は、とかく誤解されやすい。

数学の講師は女性に興味がないと思っている女学生がいる。

講義中、拓也にとんでもない質問をした女学生がいた。

「先生は恋愛をしたことがありますか？」

(バカを言うな、こう見えても女好きだ。

ただし、お前らみたいな男あさりしか能のない女は、

ごめんこうむる)と拓也は叫びたかったが、

「想像に任せる」とだけの一言で沈黙。

この女学生は、拓也にちょっぴり興味がある杏子、  
講義中、拓也の顔を見る唯一の女学生。

情けない話。拓也の講義に出席する女学生は20人弱。  
さらに、拓也の講義を聞いている女学生は、まったくいない。  
講義中、携帯片手に恋愛ゲーム。

6月9日（月）

拓也が女性心理を学びたくなった記念すべき日。

約束の3時。

「先生！」

明るい声が拓也の耳に飛び込んでくる。杏子のつくり笑顔。

「冗談かと思っていたよ。数学の質問を受けるのは、今年に入って初めてだよ」

「きゃー、うれしい！」

「別に、うれしがることじゃなかろう！」

杏子は、太陽を原点とした立体座標に、銀河系内にある惑星を色鮮やかにあらわしているロボ・MTポーンのディスプレイを珍しそうに眺めると、勝手にコントローラー付きの椅子に座った。

「試験のことなんですけど」

杏子は、信号機のようなピアスを指でなでながら、おねだりするようにつぶやく。

「あ～、試験範囲は、この前の講義のときに言ったはずだ。メールも送ったぞ」

「そうじゃなくて、受けられないんです」

杏子は、スカートの裾をゆっくりと上下させて、拓也の目を覗く。

「入院でもするのか？」

「それが、チョット・・・」

杏子は急にうつむく。

「しかし、試験は受けないと、単位はやれんぞ」

こんなことを言う教授は拓也だけ（僕は完全に浮いている）。

「だから・・・どうか・・・」

杏子は、スカートの裾をさらに引き上げる。

「だからなんだ、日本語ができとらん。ちゃんとした日本語を話したまえ」

「数学、ダメなんです。これ以上単位を落とすと卒業できないんです！」

杏子の甲高い声が爆発すると、びっくり箱から飛び出すように、うつむいていた顔を振り上げる。

「そういうことではなくてだな、試験を受けられない理由を聞いているんだ。

事情があれば早めに申し出なさい」

「受けても同じです。結果は…もうだめです」

杏子は、またうつむくと、泣いているような声でつぶやく。

「君、心配いらんよ。数学の単位を落としても、卒業はできるから」

なだめるようにっては見たが、杏子は下を向いたまま。

「3年次のとき、ほとんど単位を取っていないんです。

親が離婚して、仕送りが途絶えたんです。今は、お金のほうは、どうにか・・・

「バイトの金か？」

「はい。卒業したいんです。お願いします。先生！」

顔を上げると、杏子の目には、まったく涙はない。

「まてまて。お願いするとか、お願いされるとかの問題ではない。

とにかく、試験は受けないと単位はやれんぞ」

「わたし大人ですから。年配の人、慣れましたから。

先生、お一人なんでしょう。食事おごります」

杏子は、突然、両手で拓也の右手をつかむ。

「冗談はよせ。もういい、帰りなさい」

「先生のこと好きなんです。先生、ステキ、また来ます。バイビー」

拓也の気分は、チョーイライラ。

心の中にわけのわからぬものが住みつき、手を焼いている気分。

このわけのわからぬものは、ドクター？さやか？杏子？

拓也は、短い足でトボトボと歩く。  
モデルのような女学生の長い脚を横目に見ながらバス停に立つ。  
右手からやって来る美女ロボ運転手。  
ロボットといえども個性的。この運転手スペイン系美女。

美女ロボ運転手は、拓也のために（勝手な思い込み）  
計算された笑顔をフラッシュする。  
拓也はいつもより一つ前のバスに乗り込む。

「よう！」誰かが拓也の肩をポンと叩く。  
「なんだ、君もこのバスに乗るのか」  
拓也が振り向くとエロッチ（国文学の森）

「今日はチョットな」  
いつもは持っているバレンチーノのショルダーバッグを持っていない。  
「意味ありげだな」  
「ご馳走してくれると言うから。それでな」  
森は短い口ひげを左手でそっとなでる。

「ワイフに見つかるぞ」  
「おいおい脅かすなよ」  
エロッチは大きな目をさらに大きくして拓也の顔を覗き込む。  
「そうそう、困った子がいるよな」  
拓也は杏子のことを話すつもりはなかったが、つい口にだしてしまった。  
「ほう」  
エロッチは息を漏らすように低い声の相づちを打つ。

「別に、話すほどのことでもないけどさ。杏子って子、知ってるか？」  
「英文科の杏子か？」  
エロッチは少し間をおいて返事する。  
「よく知ってるな。ああ、その子さ」  
拓也はエロッチの大きな目を横目で覗く。  
「いい子じゃないか。講義にもちゃんと出るし。何かあったのか？」  
「いや、なんでもない。今日もうまくやれよ」  
エロッチはフレンチ通りで降りた。

エロッチ（エロ小説家として有名）に言わせると杏子はいい学生。



食事の相手は杏子？エロッチが杏子のことをどのように思おうと、  
拓也にとっては他人事（ただし、トラブルに巻き込まれるのはまっぴらごめん）。

去年、数学講師の高木が憤慨しここを去った。予期せぬ事件。  
簡単に言えば、ある女学生と高木の関係が理事長の耳に入った。  
まったく根も葉もないことなんだが。誰かの陰謀か？  
高木は10年来つき合っている拓也の後輩。  
彼は破廉恥な行為をするような講師ではない。  
だが、いまさら理事長に詰め寄っても、高木の潔白が晴れるわけでない。  
拓也もとんでもない大学に来たものだ。

ここは埼玉県浦和市の北部に位置するロボット学園都市。  
学園都市の中心部には、50の大学がランク別ひ配置され、  
それを中心として、5500のマンションが東西に伸びた楕円形を  
形作るように整然と並んでいる。  
この楕円形の二つの焦点となるところに、直方体の25階建てのビルがある。  
そこでは、それぞれ100台の美男美女ロボットが学園都市専用コンピューター  
を操作する。  
20人の人間がロボットの補佐をしている。

美女ロボ運転手を横目で時々見てはスヌーピーを読む。  
鼻でクスクス笑っていると、学園都市の南端にある  
大学所有の15階建てのGLマンションIにつく。  
拓也は5年前からこの1010号室を与えられている。  
いつも、「ただいま！」とドアを開けると「オカエリ」と迎えてくれる  
ミーシャのカワイイ声。

唯一、拓也の心を癒してくれるのは、ナポレオン・ブランデー。  
それは、特に芳香性の高い人口ブランデー。  
保温ケースからグリーンのブランデーグラスを取り出す。  
ナポレオンを三分の一ほど注ぐ。自家製香水の出来上がり。  
デリシャス！デリシャス！

一人暮らしのため寂しい毎日。変化のない生活。  
まず、世界の時事ニュースを衛星テレビで確認。  
7時30分、デリバリーセンターから食事が届く。  
食事を済ませ、健康のためミーシャを抱っこして  
イリュージョン通りを10分ほど散歩する。

書斎に戻ると、世界数学者学会のホームページをざっと見る。  
次に、ナポレオンの香りで5分間の瞑想。  
気分が落ち着くと、二ヶ月前、ヘロン出版社から依頼された  
幼児向けの絵本「女神からの不思議なプレゼント！」を2時間ほど書く。  
たまに、寝る前に娘からもらった英語版「テニスの王子様」を読む。

マンション前のイリュージョン通りはちょっとした名所。  
通りの両サイドに、それぞれ等間隔に151本の街灯が立っている。  
この街灯が愉快！曜日によって街灯の色が変わる。  
日曜日はライトブルー、月曜日はオレンジ、火曜日はピンク、  
水曜日はホワイト、木曜日はライトブラウン、金曜日はエメラルドグリーン、  
土曜日はワインレッド、と一週間を楽しませてくれる。

いつものように、拓也はペンを右手に目を閉じて、  
絵本に登場する「数と記号」の妖精たちをイメージしていると、  
突然、脳裏に現れたドクターとさやかが、妖精たちを押しつけた。

ことしの5月、初めて拓也はさやかと出会った。  
大学に彼女がドクターを訪ねて来たときのこと。  
それから5日後、大学の近くにある喫茶ピーチウイスパーで、  
さやかから初めての相談を受けた。  
こんなところで会えば、ドクターに気づかれるのは時間の問題。  
もちろん、拓也から誘ったわけではない。  
さやかがこの場所を指定した。

二人で会って3日後には、拓也が彼女と会っていたことを  
ドクターからほのめかされた。  
拓也は即座に弁解したが、彼は別段気にするわけでもなく、  
さらりと話をそらした。

もし、さやかがドクターの恋人であれば顔色が変わるはず。  
だが、特に動揺した表情は見せなかった。  
彼女の話からするとあまりにも不可解！

さやかはドクターの恋人なのか？  
単なる看護師なのか？  
なぜ、今頃ドクターを大学まで訪ねてきたのか？

拓也が知っているドクターは、精神科医としての一面だけ。  
二人の付き合いは2年ほどになるが、個人的なことはお互い話さない。  
ドクターはマスコミでも取り上げられるほど優秀な精神科医。  
心理学者としても有名。  
彼の論文は世界的に高く評価されており、画期的な見解らしい。

彼が書いた「心理学と精神医学」というかなり専門的な本を、  
拓也は気が進まなかったが時間つぶしに一ヶ月かけて目を通した。  
拓也の感想は・・・  
ドクターの理論はさっぱりわからない。  
患者の精神分析についての具体的記述は、まあまあ面白かった。

拓也はドクターについてもっと知りたい。

だが、あまりにも偉い人に思えて避けている。

ともあれ、拓也とドクターの付き合いも今年まで。

彼は来年からニューヨークのライプニッツ大学で教鞭をとる。

大学にとっては大きな痛手。

さやかのことだが、さやかの話は美化されたドクター、自分の欠点、

とりとめのない恋愛についての話ばかり。

そんなことを拓也に話していったいどうなる。

拓也には、さやかの気持ちがさっぱりつかめない。

ドクターと結婚したいのであれば、「ドクターとの仲を取り持ってほしいんです」と  
言えば、それで一件落着。

8年もつき合っていて結婚しないほうが不自然。

だが、さやかは結婚のことは一切触れない。

拓也にとってさやかの心は迷路。

6月24日(火)、拓也とさやかが会う約束の日。

拓也は約束の時間よりもだいたい20分早く、

ピーチウイスパーのいつもの席で彼女を待つ。

いつの間にか、拓也は彼女の話し相手にさせられていた。

合う時刻に関しては、拓也の都合もあり拓也が指定する。

さやかは、いつものように2時5分にやってくるはず。

さやかと会う前の不思議な「時間と空間」は、拓也が今までに経験したことがないもの（時間が止まったような、心地よい気分）。

拓也はさやかを好きと思ったこともなければ、恋人にしたいとも思っていない。

ただ、拓也はさやかの女学生にない清潔感と透明感に惹かれている。

約束の時間より5分経つ。この時間がさやかの時間。

いつものように、ガラス窓の向こうに不思議な微笑が現れた。

拓也はさやかを待っているときの不思議な快感を捨てたくない、

また、さやかを嫌っているわけでもない。

だが、これ以上話を聞いても、どうすることもできないことを告げることにした。

彼女が席に着くと多少の躊躇はあったが、

「悪いけど、会うのは今回が最後にしてほしい」と切り出す

(やっと言えた、気が弱い僕)。

「え！」さやかはしばらくしていつもの口調で話し始めた。

「どのように話していいのか・・・わたしはドクターを尊敬しています。

それ以上に”命”を支えてくれる人です。ずっと、甘えていたいんです」

「わかった、結婚したいんだな」拓也は父親の口調。

「いいえ」さやかは即座に答えた。

「僕には君ら二人の関係は理解できん。

それじゃ、君と会うのは今日までということだ」

「待ってください、先生！まだお話ししたいことが。

ところで、先生はどのような女性がお好きですか？」

「急に話を変えられちゃ困るよ」

「大切なことですから」さやかは、少し強い口調。

拓也はしばらく黙っていた。このまま無言で帰ってしまおうかと思ったが、

口が勝手に返事をしてしまった。

「そうね、やっぱり色っぽくて、和服が似合う女性ですかね」  
「そうですよね。今は、奥さんとの関係はどうなんですか？」  
「再婚しているよ。離婚してからは、一度も会っていない」  
拓也は隠すこともないと思い事実を答えた。

「先生は再婚なされますか？」  
「いや～、運命に任せることにしているけど」  
拓也は深く考えずに答えてしまった。  
拓也はいつの間にかさやかな誘導尋問を受けていた。  
彼女への気持ちが振り出しに戻ってしまった。

「ドクターのことなんだが、彼は女嫌いなのかもしれないな。  
37歳にもなって、いまだ独身だ。冷たいようだが、  
彼のことはあきらめたまえ。あなたなら、きっといい男性と出会えるから」  
拓也は突然、思いもかけないことを言ってしまった。  
彼女のために言ったのか、自分のために言ったのか、  
少し顔がほてってきた（もてるドクターをねたんでいるのか？）

「離れられないんです。ドクターに甘えていたいんです」  
「しかし、結婚する気はないと言ったばかりじゃないか。  
君はどうかしているよ。失礼だが、ドクター以外に彼氏はいないのかね」  
拓也は話し終わるとすばやく周りを見渡す。  
荒立った声を聞かれたくなかった。  
運良く、この時間は客も少なく、隅の席だったのを幸せに思った。  
「彼氏はいます。結婚は考えてはいません。できないんです」  
「もうよそう、僕は数学者だ。ドクターのような精神科医でもなければ、  
心理学者でもない。僕はどうかしていた。  
君の相談に乗ってやっているつもりになって、いい気分になっていた。  
浅はかだった。それじゃ」

「待ってください、先生。まだ、お話したいことが」  
「今言ったように、僕に相談しても無駄だ。  
いや、もうこれ以上会わないほうがいい。変に思われる。  
君は、恋人でもなければ愛人でもない」  
「はい！私も……先生……これからは、別のところでお会いしましょう」  
「だからだね！君！」  
「おっしゃりたいことは……」

「これ以上、僕に何をしろと言うのかね」

「時間だわ、先生。お電話番号、教えていただけますか？」

また、さやかに麻酔薬のような「魔法の言葉」をかけられてしまった（つくづく情けない）

月曜日は特に混む（暑い日はキモイ）。  
バスに乗り込むまでに下着が汗をかいている。  
香水の匂いが鼻につく。  
動物性の香水を撒き散らしている幼顔の女学生。  
拓也にくつつくように立っている。  
拓也はこの子がお嬢様大学の学生でないことを願っては見たが、  
どこかで見たような顔。  
きつい匂いが拓也の鼻を突き刺す。

拓也は目を閉じて、絵本のことを考える。  
停車と同時に目を開けると、女学生に囲まれたドクター。  
眉間にしわを寄せ、空を眺めて立っている。  
彼の目はすばやく拓也を発見したらしい。  
バスに駆け上がると、女学生たちが道をあけてあげたかのように、  
難なく拓也の左隣に現れる。

「先週は、さやかに頼まれた患者のことで、休ませてもらったよ」  
「姫野さやかさんですか？」拓也は顔をしかめる。  
「はい。患者のことだけど、かなり重症だね。  
まだまだ、治療を続ける必要がある」  
「患者は暴れたりするかい？」  
「いや、いたっておとなしいものさ。暴れる患者もたまにはいるけどさ」  
ドクターは普段見せることのない笑顔を見せる。  
「悪いけど、医学のことはわからないよ」  
「わかりやすく、いずれ話しましょう。さやかのこともあるから」  
なぜか、今日のドクターの口調は優しい。

校門前にバスが止まると、ドクターはいつものように、  
忘れ物でも取りに行くように足早に駆けていく。  
きつい香水の匂い。あの子！少し残念（顔はプリティなのに）

拓也は研究室の椅子に座りドクターの話を思い出していると、  
映画を見るように昨夜のことが鮮明に脳裏に現れる。  
昨夜8時10分ころ、突然、さやかからの電話。  
拓也はミーシャを抱っこして、大好きな日曜ミステリー劇場を見ていた。



拓也のマンションの右斜め向かいにある

喫茶チェリータイムにいるから、会いたいという。

拓也は即座に断ろうと思ったが、この際はっきりさせたく会うことにした。

さやかはいつものジーパン姿で隅の席で窓に視線を向けていた。

入り口で切り出す言葉を反すうし、ゆっくりと正面の席に座った

(今日こそはガツンと言ってやる)。

「ありがとうございます。信じていました」

拓也には理解できない幸福感に満ちたさやかの笑顔が、

拓也の心を包み込んだ。

「あ！」拓也は言葉を失った(頭、真っ白)。

「是非、見てほしいものがあるんです」

さやかは懇願するように、不思議な笑顔を近づけてきた。

すでに拓也の心はさやかに支配され、

拓也はさやかに対して何を断ればいいのか、まったくわからなくなっていた。

さやかは、ここでは見せられないと顔を少し赤らめ、

恥ずかしそうに拓也を部屋に誘った。

拓也はガラスのように透き通ったさやかな白い肌を何度も目で味わっていると、18階建てのマンションの玄関に立っていた。エレベーターで8階まで上がると、さやかは降りて左手の803号と表示されたダークブラウンのドアを開けた。さやかが入った後、拓也は少し間をおいて入ると、そこには学生時代を思い出させるような淡く、甘い少女の香り。

きれいに片付けられたキッチンのテーブルの中央には、20センチほどのプーさん。ちょこんと小さな椅子に腰掛け、ニコニコ顔。

廊下の左手に部屋が一つ。右手に二つ。キッチンの窓は南向き。右手の部屋のドアは開けっ放し。中を覗くと、赤いバラの絵柄の大きなベッド、そのベッドの枕元に50センチほどのベビー服を着たプーさん。ベッドの左手に白のサイドボード。部屋の中央にグリーンの座椅子が二つ、その上に2枚のDVD（目がキョロキョロ）。

キッチンの右真横の部屋を少し興味ありげに覗いていると、「こちらどうぞ」とさやかは花柄のソファに拓也を案内した。部屋の隅々に目をやってみたが、女性の部屋にしては飾り気のない清楚な部屋。

目についたのは、二人で写った写真。タンス、テレビ、サイドボード、窓の横の壁、いたるところに二人で写った写真。左手には赤いサイドボード。その左横には女性雑誌が飛び出さんばかりのマガジンラック。その赤いサイドボードの左側上段にはノートPC、中央にテレビ、右側三段に区切られた棚には、推理小説と思われる本が200冊以上。

正面の二人用のソファの上には分厚いゲーム雑誌。表紙には美男子ロボ・スーパーキングIIIの横顔。雑誌の横には80センチほどのピンクのスカートをはいたプーさん。

軽い気持ちでさやかに従ってきた拓也。  
二人っきりになったことを拓也は後悔する。

「君と一緒に写っているのは、友達の看護師かい？」何気なく拓也は聞く。

「看護師ではないけど、一緒に住んでる子よ。アンナというの。

かわいいでしょう。今度紹介するわね。まだ23歳よ。

どうぞ、今年開発されたコーヒーです」

さやかはプレートに乗せ運んできたコーヒーをテーブルの上に置く。

拓也は香ばしい香りをかいでほっとする。

「君の友達は、ゲームマニアみたいだね」

「ああ、それ。まあそんなところね」

さやかはソファの上の雑誌を一瞥すると、

どうでもいいような返事をする。

「もういいだろう。見せてくれないか。

君の同僚が帰ってくるんじゃないのか？」

しだいに、苛立ちが高まってくる。

「アンナはいつも2時過ぎなの。心配なさないで。

先生は結構有名でいらっしゃるんですね。ドクターに聞きましたわ」

「僕のことはいいから、早く見せてくれないか！」

「先生ってせっかちなのね」

さやかは子どもっぽい笑みを浮かべる。

拓也がコーヒーに口をつけると、さやかは何かを取りにいくかのように、隣の部屋に消えた。

5分ほどすると、さやかはパールホワイトのフレアスカートに

脇の下が大きくカットされたオレンジ色のノースリーブブラウス姿で現れると、

モデルのようによく回ると一回転（シンデレラモードのさやか）。

「先生暑くありませんか？」

さやかは脚を傾げて拓也の正面に座る。

「いや」

「エアコンの効きが悪いの」

「何度も言うようだけど、いい加減に見せてくれないか？」

困るよ。僕は独身なんだ。この年になっても男だからね」

拓也の視線は、さやかの白い脚に釘付け。

エッチモードの拓也。

「先生は思った通りの人でしたわ」

「どのようにかね」拓也の声が破裂する。

「私をしっかり見つめてくれる人です」

「冗談はよせ！もう帰る」

拓也は一気に立ち上がる。

「先生、見せたいものが！自分で言うのもなんですが、自信作なんです」

さやかな強い口調は、拓也の動きを止めた。

「だから、早く見せてくれよ」

「約束してくれます？見るだけで決して触らないって」

「ああ、神に誓って約束するよ。早く見せてくれ。

見たらすぐに帰るから。どこなんだい、見せたいって物は？」

しばらく、さやかは黙っている。

「今からお見せします。私の裸です！」

さやかは、すっと立ち上がる。

「君は、僕をからかっているのか！」

「いいえ、私のお願いなんです」

「君はどうかしてるよ。今夜のことは忘れるから、僕と会うのは今夜限りにしてくれ」

「なぜ見つめてくれないんですか？先生を信じているのに」

「何を、どのように、信じているのかね」

「先生が私を救ってくれることをです」

「自分で言うのは何だが、僕は学会でも品行方正で通っている。万が一、このようなことが外部にでも漏れたら、大変なことになる。どうして僕を苦しめるようなことを言うのかね」

「決してこのことは誰にも話しません。心から好きなんです。

とても、先生のことが」

「それじゃ、僕を彼氏にしたいのか？」

「それとは別です。お願いを聞いてほしいだけです」

さやかは説得するように、ゆっくりとした口調で言う。

「ドクターにもお願いしたのか？」

「はい、ドクターは快く見つめてくれました」

さやかの不思議な笑顔。

「まあ、彼は医者だからな。患者を診るのは当然だろう。だが、僕は違う。ただの男に過ぎない。もう、こういう話はよそう。失礼！」

「私を見捨てるんですね！」

さやかは怒ったような声を張り上げる。

「見たからってどうなるんだ」

「救ってほしいんです！」

「女好きの、ただの男なんだぞ。わからん、まったく、わからん」

「ただ、じっと見つめてほしいんです。お願いします」

「何のために！僕に・・・僕に恨みでもあるのか！君の願いは理解できん」

「お願いします。先生。信じてます。お願いします！お願いします！」

ややかの異常な視線は、拓也の呼吸までも止めてしまった。

反数学的空間に浮いている拓也。

方向も、時間も、重力も、権力もない「さやかの愛」

さやかは魔女？

#### 四

ドクターは、薬を使わずに精神病を治療する方法を大学のときから研究している。

うつ的で神経質なさやかと攻撃的で情緒不安定なアンナ。約3年前から、二人はドクターが用意したマンション（病室）で同居している。

部屋ではいつも「裸」。  
これはドクターが考え出した、「治療方法」の一つ。  
今の二人の症状からすると、ドクターの治療法方は成功している。

アンナはさやかのことが気になり、早めに仕事を切り上げて帰ってきた。

「ただいま。やっぱし、電気屋ね」  
アンナはドアを閉めると、すぐに胸のボタンを外し始める。  
「あら、アンナ、今日は早いじゃない」  
チェスに夢中のさやかは、振り向かずに返事する。  
「さやか、どうだった。先生！」  
アンナは服を脱ぎながら、嬉しそうに言う。  
「ドクターが、言ってた通りの人だったわ」  
さやかは跳ねてキッチンにやってくる。

「ラッキーじゃない！」  
裸のアンナはキッチンの席に着く。  
「少し汗臭いわよ。シャワー浴びましょ」  
さやかは鼻をつまむ。

小柄なさやかと大柄なアンナは、  
シャワーと戯れるように無邪気にはしゃぐ。  
シャワーの水は、さやかの透き通った肌をますます輝かせる。

「今日は最高の日だったわ！」  
小さな椅子に腰掛けるさやか。  
肌を守るように広がる白い泡。



「これからもお願いするの？」

勢いよく飛び出すシャワーの水。

光を放ちながら、さやかの透き通る肌の上をすべるように流れる。

「先生は間違いないわ」

目を閉じて快感に浸るさやか。

自分の演技を思い出し、白雪姫モードのさやか。

「よかったね、ドクターに感謝ね」

「ドクターも、先生も、王子様だわ」

さやかは、神に祈るように両手の指を組む。

キッチンに戻ったアンナは、ラグビーボールのようなスイカを、  
冷蔵庫から取り出す。

まず、四分の一に切る、さらに、それを斜めに切る。

ほぼ同じ大きさの扇形のスイカを二つのさらに、二つずつ載せる。

サンバのリズムでお尻をふりふり、アンナはお皿を運ぶ。

「あいよ！やっぱし電気屋ね」

アンナは小麦色の乳房の谷間から噴出した汗を左手で軽く拭う。

「私たちエアコン無い方がいいかもね。

汗をしっかりとかいたほうがいいから」

さやかはテーブルにある小さな扇風機のスイッチを入れる。

「夜中、起きちゃうんだよな。それより、先生のこともっと聞かせて」

アンナの大きな口の端からたれ落ちたスイカの汁は、

乳房の谷間の汗と合流しおへそで止まる。

「そうね、本当によかったのかしら」

さやかはスイカをじっと見つめる。

「なにが？」

アンナはスイカの種をプレートに吹き出す。

「先生のこと」

「心配ないよ」

アンナは大きな口で二つ目のスイカにかぶりつく。

「だけど、さやかのしていること、卑劣なこと。先生を不幸にすること」

「ドクターを信じるの！先生もきっとさやかの味方だよ。

ほら、二人とも2年間も薬飲んでないし！」

「寝ようか」

さやかは食べ残しのスイカを置いてベッドに向かう。

「さやかは愛って、嘘の愛よね」

「さやかは、さやかの愛しかたでいいのよ。  
病気だと思うから自分を責めるってドクターがよく言うじゃない。  
あたいだって、つい自分を病気で思っちゃうのよ。  
それがダメなのよね。」

アンナは枕元で寝ていたプーさんを右手で掴むとさやかに渡す。

「男の人を身体で愛せないのよ。これからも、ずっと」  
プーさんをしっかり抱きしめると、さやかの目じりから光が走る。  
「アンナがいるじゃない。お互い、過去に生きるんじゃない、  
幸せを創るのよ。ドクターに言われたでしょ」  
「アンナは男の人を愛せるじゃない。ごめん、こんなこと言って」  
さやかはアンナにプーさんを手渡す。

「仕事、仕事。お金のためにやってるだけよ。前にも言ったじゃない。  
男を愛すがらじゃないって」  
アンナはプーさんを天井に向かって放り投げる。

「アンナのことよくわかってるのに愚痴なんか言って、  
先生のことでもうかしてるんだわ。ごめんね！」  
「さやかは考えすぎだよ！」  
アンナはプーさんでさやかの頭をポンと叩くと、さやかに渡した。  
「これからも一緒にいてくれるわよね、アンナ」  
さやかはプーさんをしっかり抱きしめる」

「元気出せよ！さやかは傷ついた子どもたちの女神だろ。  
しっかりしろよ！」  
「そうね」さやかにほんの少し笑みが戻る。  
「ところで、病院の方はどう？」  
「どうして、かわいそうな子どもたちが多いのかしら。  
まだ、5歳の女の子よ！親に虐待され続けて、  
体じゅうにたくさんの傷があるの。大人を怖がっているのね、  
誰とも話そうとしないわ」  
さやかはプーさんをしっかり抱きしめ涙をこらえる。

「そんな親は殺してしまえばいいのよ」  
アンナは拳で思いっきりベッドを殴る。  
「本当ね、世界中で、たくさんの子どもたちが殺されているのよ。」

こんなことがこれからも続くのね。

大人たちは、どうして弱い子どもたちを救ってあげようとししないのかしら？」

「しようがないよ、みんな、自分のことで精一杯なんだから。

さやか、私ね、孤児院を建てるつもりなの。

お金は足りないと思うけど、やれることをやって死にたいの」

初めて、アンナは、自分のやりたいことをさやかに伝えた。

「そうだったの。だから、がむしゃらに働くのね。

そういえば、アンナ。明日からロケに行くって言ってたわね」

「軽井沢に行くの。帰ってくるのは土曜日だな。だけど、もう年ね。

ロボの肌を見ると落ち込んじゃう。いつ、お払い箱になるか。

そう、新人のキューティーロボ1919が売れてんのよ。負けるものか！」

人間女優はロボ女優におされ気味。

「アンナって、本当にたくましいのね」

さやかはプーさんをアンナの胸にポンと投げる。

「まあね。ガッツリためなくっちゃ。弟のためにも！」

アンナはプーさんを赤ちゃんのように抱きかかえ、まぶたを閉じる。

「あ、いけない！ドクターにメールしなくっちゃ」

さやかはアンナを起こさないように、そっと隣の部屋に向かう。

安部精神病院では、凶暴な患者を除いた規律に従う患者は、普通の生活ができるようになっている。

また、学校を併設しており、教室、図書館、映画館、体育館、グラウンド、プール、コンピュータールーム、ロボット開発ルームなど、子どもたちに必要な設備はすべてそろっている。

ドクターはさやかの方が必要だと考えたとき、カウンセリングをさやかに依頼する。たとえば、親の虐待を受けた児童たち、殺人事件を起こした子どもたち、あるいは、自殺しそうなうつ病の老人たちのカウンセリング。さやかは病院においては一看護師だが、子どもたちにとっては「女神様」。

3日前、11歳の男の子が父親殺害で当病院に収容された。今日、さやかはこの子に第一回目のカウンセリングを行う。名前は、飛来 清（ひらい きよし）11歳。一ヶ月前、バットで父親の後頭部を一撃し、殺害。動機は、母親を父親の暴力から守るため。

家族構成は36歳の母と8歳の妹。趣味はサッカー。

将来の夢は、プロになってワールドカップに出場すること。

さやかはカルテを思い出しながら、ホワイトのブラウスに、少女が着るようなピンクのフレアスカートで少年の部屋に入った。ブルーのトレーニングウェアを着た清は、勉強机から眼下に見えるサッカーグラウンドをぼんやり眺めている。

「清君！」

「はい。今日は、おじちゃんじゃないね」

清は少し警戒しているような表情で返事する。

「これからは、お姉ちゃんが担当よ。よろしくね」

「やったー！うれしいな！」

清はカウンセリング用に置いてある丸いグリーンテーブルに

飛んでやってくる。

「すごく元気みたいね」

さやかはテーブルに着くと、笑顔で清に声をかける。

「うん。だけど、友達と遊べないから、つままないよ」

「そうね、しばらくは寂しいね。昨日はお母さんと妹さんが来られたみたいね」

「うん、早くここから出たいよ」

「気持ちはわかるけど、反省もしないとね」

「なんの？」

「お父さん殺しちゃったこと」

「殺したんじゃないよ。悪魔を退治したんだ、お母さんのために」

「だけど、命を奪うことは罪になるのよ」

「そんなことないよ。あの鬼は、狂った殺人者なんだ。

生かしておいたら、お母さんは殺されていたんだ。

僕はまったく悪くない！」

少し怒った顔でさやかをにらみつける。

「清君の言っていることは、よくわかるわ。

だけど、これからは大きな悲しみと苦しみを、

一生、背負って生きていくことになるの。わかる？」

「どうして、正義の僕が苦しむの？お姉ちゃんもおじちゃんと同じだね」

窓のほうに目をそらし、席を離れようとする。

「待って。そうね、清君の言っていることは正しいの。

「ただ、お父さんが死んでうれしい？」

「うれしいとか、そんなことはないけど。

死にそんな呼吸困難にならなくてもすむし、

夜、夜叉のような悪魔にうなされなくてもすむよ」

清はテーブルの下に合ったサッカーボールを、

左足で遊びながらつぶやく。

「そうか、鬼はいなくなったからね。お母さん殺されなくてすんだもんね」

さやかは笑顔で清の目を見つめる。

「そうだよ、本当によかった。本当はあいつも殺すつもりだったんだ」

「あいつって？」

僕をいじめる中学生さ。子分をつれて、金をよこせとか、いやだと言うと、

よってたかって殴るんだ。いつか殺してやる」

清は誰かを殴るような真似をすると、窓のある壁にボールをける。

「ずっといやな目にあっていたのね」

「こんな悪いやつを殺すことは、いいことだろ！」

清は目を吊り上げる。

「いい事かどうか、お姉ちゃんにはわからないわ。

確かに悪いやつはいるよね。

お姉ちゃんにも殺したいって思っているやつがいるの。

ずっと以前から」

さやかは大きく目を開き拳を作る。

「だったら、殺しなよ！」

「そう思うけど、殺せないの。なぜかしら」

「気が弱いんだね、思い切ってバットで殴ればいいんだよ」

清は少し強めに左足で壁にめがけてボールを蹴る。

「思いきって、やっちゃんおうかしら」

さやかは拳をつくると大きく腕を振り、

誰かを殴る動作をする。

「やっちゃんえ！やっちゃんえ！」

清は跳ね返ってきたボールを拾うと、

両手で頭の上にボールを乗せる。

「清君！犬好き？」

「大好きだよ。毛がつやつやしたハスキー犬、飼ってるんだ。

ラスカーって言うんだ」

「ラスカーが死んだら悲しい？」

「当たり前じゃないか！何、言ってるんだよ」

「もしもの話よ。ラスカーがね、人を噛んでしまったの。

みんながこの犬は危険だからといって、

ラスカーを殺してしまったらどう思う？」

「ラスカーが噛むわけないよ。バカなこと言うなよ」

清は、さやかにボールを投げつける振りをした。

「だから、もしもよ」

さやかは一瞬頭を右に振ったが、笑顔で訊ねる。

「どうして、そんなこと言うんだよ。お姉ちゃんなんか、嫌いだ！」

清はボールを胸の前で抱くと、目じりを下げて悲しそうな声。

「あのね、お父さんのお母さん、清君のおばあちゃんがいるよね。

おばあちゃんにとっては、お父さんは子どもよね。わかる？」

「うん」小さくうなずく。

「お父さんは、おばあちゃんが大好きな人よね。

わかるでしょ。おばあちゃん、今どんな気持ちだろうね。

清君は、大好きなラスカーが死んだら悲しいじゃない。

誰だって、大好きな人が死んだら気が狂うほど悲しいね」

「うん。お母さんとか、妹が死んだら悲しいよ。ラスカーも」

ボールをテーブルの上に置くと、その上にあごを乗せて小さな声で言う。

「誰だって悲しむのよ。だから、鬼のような人が死んでも、

悲しむ人はいるの、わかるよね」

「うん、お父さんが死んで、おばあちゃんは泣いているんだろ」

また、ボールを抱きかかえると、何かに気づいたような表情。

「その通りよ。清君がお母さんの命を救ったことは、

神様はチャンとわかってくれるの。だけどね、

それと同時に、清君は、一生、おばあちゃんと同じように悲しむの。そうでしょ」

「そうだね。だけど、もう殺しちゃったから、どうしようもないよ」

ボールをさやかに向かって転がす。

「そんなことはないわ。清君には、愛があるわ！」



ボールを受け取ったさやかは、清に転がして返す。

「愛って？」

「お母さんのために、やったんでしょ。

お母さんのために、自分の命を捨てたのよね」

「そうだよ」

「これが愛なの！好きな人のために、すべてを捨てるのが愛なの。

愛があれば、これから多くの人を幸せにできるの。わかってくれた？」

「まだ、子どもだからわかんないよ。だけど、人を幸せにしたいな！」

両手でボールを跳ね上げながら、清は今までに感じたことのない、

さわやかな気持ちを感じた。

「それでいいの。お父さんのことも、中学生のことも、神様に任せるの。

これからは、愛に生きればいいの！お姉ちゃんが見守ってあげるから」

「うん、もう、人は殺さないよ。悲しいことだから。

おばあちゃんにもあやまるよ」

ボールを脇に抱えると、大きな声で訴えるように言う。

「わかってくれたのね。お姉ちゃん、とってもうれしい」

「お姉ちゃんは、きれいだね」

清は笑顔をつくると、少し恥ずかしそうに小さな声で言う。

「あら、うれしいわ」

「一つ、お願いがあるんだ。

僕、お姉ちゃんみたいに優しい人になりたいんだ。

だから、キスしていい。あ、手にだよ」

自分の左手の甲を指差す。

さやかは立ち上がり、清の左側に立つと左手を差し出す。

清は両手で目の前の手をすくう様なしぐさをすると、

さやかの手の甲に軽く唇を押し当てる。

「僕も、お姉ちゃんみたいになるよ。だから、見捨てちゃダメだよ」

「もちよ。お姉ちゃんに、任せなさい」

「おじちゃんにも、このこと、話すよ。いっぱい、あやまるよ」

清はさやかの目をしっかり見つめると、目を輝かせて立ち上がる。

「えらいわ、これからもがんばるのよ。自分に負けちゃダメよ」

さやかは、清の瞳をしっかりと見つめるとドアに向かう。

「また来てよ。お姉ちゃん！」

「これからは、清君のお姉ちゃんだから、時々、遊びに来るわ」

「嘘ついちゃダメだからね。きっとだよ！きっとだよ！」

清は泣きそうな声。

さやかは左手を肩まで上げ、指先を小さく動かすと、ドアから消えた。

さやかの場合でお礼がしたい・・・

拓也は、今朝のドクターの言葉を思い出した。

何のことか、察しはつく。

拓也はさやかとの不思議な出会いを思い出す。

さやかとの出会いからあの日の出来事まで、

ドクターのシナリオだったのか？

さやかの件をうらんでいるわけではないが、

ドクターへの憤りがこみ上げてきた。

拓也の足はドクターの研究室に向かっていた。

キーボードを叩いていたドクターは、

ドアを開けた拓也にまったく気づいていないようす。

拓也は足を一歩踏み入れ、再度軽くドアをノックする。

「関先生ですね」

ドクターは、拓也がやってくるのを予測してたかのように言う。

「は、はい」

拓也は右足を引っ込める。

「先生のお気持ちはごもつともです」

独り言のように言う。

「まあ、今朝の言葉が気になったもので」

ドクターの後姿を見つめながらソファに腰掛ける。

「お礼をしなくてはなりません」

ドクターは書類に目を向けたまま振り向く。

「別に、さやかさんのことであればかまいませんよ」

さやかとのことは誰にも話したくない。

「今日はお互い時間が取れそうですね」

「できればドクターの精神分析の話をお聞かせ願おうかと思ひまして」

「今、ホームページを開いてましてね。質問や悩みが、ほらこんなに」

ドクターは左手の書類を拓也の目の前に差し出す。

「大変でしょう。やはり精神病に関するものですか？」

「若い子の書き込みですよ。読んで笑うようなものもありますよ」

「しかし、深刻な悩みの相談も多いんでしょうね」

「確かに、中学、高校生からが大半ですが、

最近小学生からの相談も増えましたね。

安部クリニックのホームページ相談を始めてから5年になりますが、研究にとっても役立ちます。

「いじめ、不登校、自殺に関することですか？」

「はい、それもありますね。相談には大人も気づかない、いや、”理解しにくい子どもの心”について詳細に書かれてましてね、とても参考になります。

精神病院のことはご存じないと思いますが、

来院の患者は、自分の気持ちを素直に言いません。

いや、他人の顔を見ると言えないといったほうがいいでしょう。

この相談なんかとても素直です。

奈良市の私立中学2年の男子からです」

～ 最近、女性の下着に興味を持つようになりました。

家族がいないとき、干してある姉の下着を触ったり、

匂いをかいだりしました。僕は変態でしょうか？ ～

「まさに、素直な子ですね。こういう子、好きですよ。

性に関する悩みはいつの時代も変わりませんな。

僕も同じようなことがありました。

だけど、病気だとか変態だとかは思いませんでしたが。

厳しいしつけをされた、いいところのお坊ちゃんだな」

拓也は笑顔で話す。

「こちらは、かなり深刻な問題です。札幌市の中学3年の男子からです。

～ 母と弟と僕の三人で暮らしています。

先日、学校で具合が悪くなり早退しました。

母が仕事から帰ってくるのはいつも7時過ぎです。

だから誰もいないはずなのに、母の部屋から奇妙な声でしたので、

泥棒かと思ってドアを少し開けてみました。

そして、すぐに家を飛び出し、その日は友達の家泊まりました。

知らない男といる母を見たからです。

母を信じられなくなりました。

これから、僕はどう生きていけばいいのですか？ ～

「性に関する男の子からの悩み相談が増えています。

性的感情や自慰行為は成長過程では自然なことですが、  
おそらく、小・中学校受験のため、小さいときから禁欲的なしつけを  
されたと思います。

問題なのは、親の態度です。

最近は極度に子どもを管理しています。教師もしかりです。

また、性的成長が罪悪であるかのようにみなす親や教師が増えています。

そのため、子どもたちは、性的感情や行為を病気とってしまうのです」

「そうなんですか。知能階級といっても僕の親は放任主義でしたから、  
助かったというわけですか。よかった」

「年々、子どもたちに精神病が増えています。現に、精神病患者の7割は10代です。  
大人では解決できないような心の問題を抱えています。

いや、大人たちが子どもたちに復讐される時期が来たといえます」

ドクターは拓也を脅すようなことを平然と言う。

「復讐！ いったいどういうことですか？」

拓也は無意識に大きな声をだしてしまった。

「いじめ、不登校、引きこもり、自殺、拒食症、麻薬、恐喝、殺傷事件、  
家出、中退、精神異常、これらすべてが大人への復讐と言えます」

「よくわかりませんが」

拓也の全身に鳥肌。

「大人たちは自分たちに都合のいい管理、教育、ビジネス、出産を  
ここ200年やってきたわけです。ご存知のように、トップランクの学歴を  
取得するには、巨額の寄付金を支払うか、もしくは5段階の知能検査を  
パスしなければなりません。

そのため、大人たちは精子バンクから優秀な精子を購入したり、  
子どもたちに英才教育を強制して、高度に優秀な子どもをつくろうとするのです。  
目的は、子どもたちに世界的超資産家によって運営されているトップランクの  
大学に合格させ、さらに、高額な報酬が約束されたロボットクリエイターの  
ライセンスを取得させることです。あるいは世界政府機関へ就職させることです。

わかりやすく言えば、親たちはお金と権力を約束する学歴を  
子どもたちに獲得させるため、子どもたちの心を傷つけるような  
受験教育を強制してきたのです。

さらに、大人たちは自分たちの金儲けのために子どもたちを利用してきたのです」

「少しはわかるような気がします。僕にも娘がいますから。  
確かに、子どものためというより、親が考えた幸福を子どもに  
押し付けてきたように思えます」

「最近、娘さんから、びっくりするようなことを言われませんでしたか？」

「ええ、まああ・・・」

「御礼をしなくては。僕の気持ちとってください」

ドクターは一枚の会員証を手渡す。

・・・ クラブローズ、第二コアビル・・・拓也は心でつぶやく

「僕は一足先に行ってます。よろしければどうぞ」

ドクターは帰る準備をする。

拓也はタクシーを拾ったドクターと校門前で別れた。

マンションに戻りメールを開いてみると、  
娘の佳恵からのメッセージが飛び込んできた。

Hi! Dad. How are you? I'm pretty good.  
I'd like you to meet my friend, Yukina.  
She is a member of tennis club.  
By the way, I cannot seem to learn English.  
Do you have any advice?  
I'm looking forward to seeing you.

See you soon.  
Love always, Yoshie.

P.S. Please come to see me to Kyoto this summer.

母親、律子のストイックな性格を嫌っている佳恵とは、  
離婚後もメールのやり取りをしている。  
佳恵は拓也にいろんなことを相談してくる。  
アドバイスとして英語の上達にはリスニングを毎日するようにと、  
返事のメールを送った。  
拓也は佳恵の将来について考える。

佳恵は高校卒業後、留学を希望している。  
僕はオーストラリア州のテニスの名門シドニーレーバー大学を  
勧めている。  
本人はその気であるが、律子は反対しているらしい。  
佳恵は僕の力を借りたいのであろう。  
律子と話し合いをする立場ではないが、佳恵の頼みであれば  
恥を忍んでお願いしてあげよう。  
通訳になるには留学は不可欠。  
佳恵の夢を実現させてあげなくては。

コアビルまではタクシーで行けば20分ほど。クラブローズ。  
一ヶ月前、拓也は理事長に誘われたことを思い出す。  
確か、超資産家が行くという有名なクラブ。  
拓也はホームページを見る。入会金を見て真っ青。  
今までこのような高級クラブに行ったことがない。  
拓也のお酒は寝る前にブランデーを飲むくらい。

拓也は身分不相応なクラブに行きたいとは思わないが、  
ドクターの私生活を垣間見るには絶好のチャンス。  
彼の誘いに乗ってみる。  
拓也は大通りでタクシーを降りると、角の18階建てのグリーンビルから右に曲がる。  
前方に、杏子に似た子が歩いている(まさか！)

クラブに着くと、時計の針は8時8分。  
入口カウンターで会員証を見せ、受付に「関ですが」と言いかけると、  
「お待ちしておりました」と即座に返事が返ってきた。  
ピンクのロングドレスを着た妖艶な女優が、拓也を奥の席に案内した。  
テーブルは横長の楕円形。それをはさむ様に半楕円形のソファ。  
色は純金が散りばめられた白。  
ドーム型の天井は、複眼のような小さなライトたち。

「安部さんは」と言いかけると「すぐに参りますので」と  
美の遺伝子を与えられた女優は、拓也の目を見つめて丁寧と言う。  
ここは、クラブというより特殊なプラネタリウムのような不思議な空間。  
天井のライトの色が時間の経過と共に変わっていく。  
さらに、それに伴い女優のドレスの色が変わっていく。  
先ほどまでピンクだったドレスは、ピンクとグリーンを重ねたような不思議な色。

「え！」  
拓也の目の前にガラスのように透き通った白い肌（幻覚じゃない、確かに裸！）  
「10分ごとに、0, 1秒間光がいたずらするんです。  
ホステスが着ているドレスは、ある一定の波長の光が当たると透明になる  
特殊な合成繊維でできているのです」  
女優は科学者のように説明する。

「信じられない！この音楽は？」



耳を澄ますとかすかに音楽が聞こえる。

「アルファ波ミュージックのネイチャーウェーブです」

「はあ・・・」

しばらくすると、和服姿の30歳前後のママと思われる、  
女性にしては肩幅が広く、大柄の女性がやってきた（まさか、ニューハーフ）。

「先生ようこそ。ドクターに伺っておりますわ」

深く会釈をすると正面に座る。

「恐縮です」

面接を受けてる気分。

「こちらはママです。私はルミです。どうぞよろしく」

ドクターが早くやってくるのを心で願う。

初めての女性には言葉が出ない。

「こちらこそ」

お見合いの時のように両膝をそろえている拓也。

「先生のお相手してちょうだい。ドクターをお呼びするから」

ママは軽く会釈するとカウンターへ向かった。

確かに高級なブランデーだ。ブランデーは寝る前に飲むが、一般庶民が飲むブランデーとはまったく違う。ブランデーに関しては口が肥えているほうだが、これは違う。生まれてはじめて経験するまろやかさとこく。さらに、香りが最高にいい。すべて最高級というわけか。

「こんなブランデーは初めてですよ」  
「このブランデーはマリンピュアと言って、水、フルーツ、リカー、香料すべてP1・デベロ・ステーションで開発されたものです」  
一種の健康ドリンクでもあるんですよ。ロボットって頭がいいんですね。  
あら、ぜんぜん減ってないわ」  
拓也はあわてて残りを一気に飲み干す。

「キャー、先生、お強いこと。ステキ！」  
ルミはくっつくように座りなおす。  
「ルミもいいかしら」  
赤い唇を少し動かしながら、じっと拓也を見つめグラスを空ける。

「ルミさんは強いんだね」  
拓也は少し微笑んで驚いたように言う。  
「うれしい、先生の笑顔が見られて。チョット、がんばっちゃたわ。  
先生ったら、怖い顔しているんだもの」  
ルミの手は拓也の太股を行ったり来たり。

「ドクターはどうしたんだろう。おそいな！」  
小さな声でつぶやく。  
「今日はルミがお相手よ。ドクターにはママがついてるわ。先生、もっと飲んで」  
拓也の手をそっと包みグラスを手渡す。

「先生はどんな感じの女性がお好きですか？」  
チョコレートをつまむと、拓也の口の中に押し込む。  
「ルミさんみたいな、美しくて知的な女性ですね」  
(顔に似合わず気が強そう)  
拓也の視線はシルクに覆われた白く長い脚の上を走り、一気に蜜でできた唇まで駆け上がる。

「うれしい！」

なぜか、拓也の手は彼女の膝の上。拓也は少し紅潮し、  
よった勢いで膝を掴む。

シルクと融合した肌の柔らかさは、毛穴まで伝わってくる。

「よかったわ、先生に気に入られて。これからもひいきにしてくださいね」  
グラスを置くとルミはカウンターに向かった。

「ドクターからです」

戻ってくると、甘い香りのP2・アグリ・ステーション産のメロンを目の前に置く。  
しばらくすると、ママに支えられたドクターが老人のような足取りでやってくる。

「悪い、先生」

ドクターはかなり酔っている。アルコールに弱いドクター。

「ドクターのおかげで楽しく過ごさせていただきました」

頭を下げて丁寧に礼を言う。

「ここは先生がお好きなだけ利用できるクラブです。  
ママ、しっかり、先生を覚えていてちょうだいよ」  
ドクターの変なリズムをつけた口調。

「承知いたしました。先生にはルミが待っていますから、  
いつでもお越しく下さい」

ママは両手をそろえて丁寧に辞儀する。

「ルミ、いいわね」

ルミに目配せして、命令するように言う。

「先生、お待ちしております」

ルミは命令に従うかのように拓也に寄り添い、手をしっかり握って微笑む。  
ドクターは目をつぶっていたが、何か言いたい顔。

「先に失礼させていただきます」

拓也は立ち上がると、顔をドクターに近づけながら言う。

「やあ、あの件は後日と言うことで」

ドクターは独り言を言うように言って、拓也に握手を求めてきた。  
この握手は何を意味しているのか判然としなかったが、  
拓也は義務的に軽く握手した。

「タクシーをお呼びしますので」

ママはロボ・ボーイに合図する。

席を立つとルミは拓也にぴったり寄り添い、出口まで見送る。

拓也はドアのところで、ドクターの顔をしばらく眺める。

ドクターに何か話さなければと漠然と思ったが、ルミの甘い香りが忘れさせてしまった。

「待ってます」愛人の眼差しで見送るルミ。

タクシーに乗り込んだらと思うと、靴を脱いでいる自分に気づく。

小脳が案内してくれたのであろう。

ミーシャがキョトンとした顔で拓也を見ている。

拓也はすぐにベッドに横になったが、いろんなことが頭に浮かぶ。

目を開けると天井が揺れている。

ママの態度がルミに対して何か威圧的に感じられた。

ドクターはママに何かを依頼したのだろうか？

そこは普通のクラブではない。会員のほとんどが超資産家の高級クラブ。

入会金だけでも目が飛び出る。その会員に拓也を無料でした。

脳の研究のためなのか？それとも何か別の目的が……

いったい、なぜ？

ドクターは何を拓也にさせようとしているのか？

ひとたび閉じ込められると、二度と出られないドクターの実験室。

麻酔をかけられて運び込まれる拓也。

拓也の心に不吉な予感。

すでに、拓也はモルモットとしての役割をピノキオのごとく演じている。

拓也はモルモットとして、これからどんな実験に使われるのだろうか？

さやかと拓也はドクターにとってはモルモット。

二人は確かに実験台に乗せられた。

だが、この実験の成果は二人が独占している。

もし、二人を精神分析できなければこの実験はドクターにとって水の泡。

この点が物理学的実験と大きく違う。

拓也は風呂に入ろうと服を脱いだはずだが、いつの間にか朝。  
パンツだけの拓也は昨日の夜の事をミーシャに聞いてみたが、  
困った顔して「わかりません」と優しい声で一言。  
ほんの少しまぶたを開ける。かすかな光。  
言語化できない程の色気を持ったルミが、透き通るシルクをまとい、  
蜃気楼と共に朝日の中に現れた。

すると、突然さやかが脳裏に飛び出し、目が覚めた。  
起きて散歩しようかと思ったが、引力と勝負する気になれない。  
しばらく目を閉じていると、暗闇から昨夜のルミとの会話が優しく聞こえてくる。  
裸、ネイチャーウェーブ、マリンピュア……

電話が鳴る音。7時過ぎに電話。いったい誰？  
さやか？瞳？  
電話に引き寄せられるように拓也は立ち上がる。  
受話器を耳元に運ぶと、ドクターのフラットな声。  
「はい、病院で、1時半ですね」拓也は即座に返事する。  
昨日、接待を受けた手前断れない。  
大学とも関係があるため、是非、病院まで来てほしいと言う。

拓也は1時に病院に到着。  
目の前にはまったく予想外の建物。  
確かに安部精神病院と書いてあるが、どう見ても病院には見えない。  
外観は高級ホテルそのもの。どうりで精神病院が繁盛するわけだ。  
少しは恐怖感が薄らいだが、足が動かない。  
初めてお化け屋敷に入る気分。  
拓也は思い切って受付に飛び込む。

「関と申しますが、1時半に・・・」と言いかけると、  
受付嬢の目が2回、青くフラッシュした。  
「伺っております。しばらくお待ちください」  
ピンクのスーツを着た美女ロボは、人間そっくりの笑顔で応える。  
人間よりもカワイイ！  
受付嬢はじっと拓也を見つめる  
(きっとモニターテレビに僕の顔が映っているに違いない)

「理事長室にご案内いたします」

拓也はゆりとジャスミンを配合いたような甘い香りの後ろについて行った。  
廊下の大きな窓の外には、  
やしの木に似たおそらく10メートルはあると思われる木が、  
約5メートル間隔で並んでいる。

拓也が目をキョロキョロさせて、  
廊下を飾るピカソが描いたような絵を見ていると、  
拓也の目の前に宮殿に使われるようなバロック調のドア。

「どうぞ」  
受付嬢は軽く2回ドアをノックすると、ドアを開け静かに消えた。

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」  
奥に陣取った威風堂々としているが、どこか孤独を感じさせる理事長席。  
70歳前後の大柄で少し脂ぎった、動物園の熊のような白髪の理事長。  
彼は飼育係に餌でももらいに来るかのように、  
ゆっくりと拓也の方にやってくる。  
かなりの肥満。ダイエットしないと・・・

「どうぞ」  
拓也を座らせると、彼はソファに沈んだ。  
「いつも進（シン）がお世話になっております。  
ここの理事長をやっております、進の父です」  
「こちらこそドクターにはいろいろとご教授いただき、  
勉強させていただいております。今後ともよろしく願いたします」

「初めてでしょう、精神病院は」  
「は、はい、初めてです」  
ソファの左側にはモニターテレビが6台、  
その前には科学者が最も愛用するロボ・PSPルークII、  
さらに右側にはPCが2台控えている。

「別に怖いところじゃありませんよ。気を楽しんでください」  
理事長はむくんだ顔で笑顔をつくる。  
「ドクターは今もこの病院で研究をなされていらっしゃるんですか？」  
「やっております。女子大に勤めたのも研究のためです」  
「そうだったのですか。  
来年はライブニッツ大学で教鞭をとられるとお聞きしましたが」

「はい、ボストンにある精神病院でも研究する予定です。  
親としては、研究もいいが、早く子どもをつくってほしいものです」

「ドクターは女学生に人気がありましてね、  
立って講義を聴く学生もいるくらいなんですよ」

「日本州の女性に興味がないのか、何度お見合いをさせてもダメです。  
進のやつ、アメリカ女性に骨抜きにされたのかもしれないな。  
グラマーな女性が多いですからな。ハハハハ・・・」

「失礼します。お待たせしました」  
ライトブルーのスーツを着たドクターが入ってきた。  
拓也は理事長に深く頭を下げ、ドクターの後について出る。

ドクターの研究室は広く、入口右手に高級なソファ、左手には、モニターテレビ12台、ロボット3台。窓際のサイドボードには、いくつものトロフィー。

「ゴルフ、チェス、ビリヤード、フェンシング、サーフィン、フレンチスピーチコンテスト、ショパンコンクール、これはすごい。さすが天才！」

拓也はいくつかのトロフィーの賞を読み上げた。

「学生時代の遊びですよ」

「ところで何か重要な話でも？」

「ええ、きわめて重要です。大学と関係ある」

「いったいどういうことでしょうか？」

拓也は皮製のソファに腰掛ける。

「どうぞ」

ドクターはジャスミンティーを置くと正面に座り、15センチほどの細長い葉巻に火をつけた。

「いや、先生は吸われませんでしたな。失礼してよろしいですか？」

「まったくかまいません。話とは？」

「今の段階では、大学の運営にもかかわるものですから、すべてをお話しすることはできませんが、お耳に入れておいたほうがいいかと思ひまして」

「と、言いますと？」

拓也は身を乗り出す。

「自殺未遂がありまして、その患者はこの病院で治療しています」

「はあ、自殺未遂。大学とどのような関係が？」

「患者は当大学の女学生です」

「え！何か事件にでも巻き込まれたとか？」

拓也の声は、一オクターブ高い声。

「事件と言えは事件ですが、患者の自殺未遂の原因が重大事件といえます」

「原因とは？」

「原因は、神の子を流産したことです」

「神の子？」

カップを運んでいた手が、急に止まる。



「患者はある新興宗教の信者で、教祖の子を懐妊したのです。  
ところが、その子を流産したわけですよ」  
「教祖の子をですか。しかし、神の子じゃなくて、人間の子じゃないですか」  
「ところが、信者にとっては、神である教祖の子は神の子なのです。  
今でも、目を離せば自殺しかねません。厳しい監視が必要です。  
また、教祖の子を出産した女性は20人以上いると聞いています。  
今、大学内にも、学生だけに限らず信者がいると聞いています。  
今年に入り、中退、留年が急に増えました。  
御父母から何件かの捜索願いがあり、  
警察による教団の捜査が進められています。  
これ以上は、時機を見てと言うことで、内密にしておいてください」  
ドクターは拓也から目をそらし、葉巻を静かに吸う。

「はい。しかし、僕にはまったく理解できません。神の子とは」

「ただ、医者として言えることは、信者になる多くの女性は小さいときから、禁欲的なしつけを受けた女性と言えます」

「と、言いますと？」

「彼女たちは小さいときから人間との性行為は罪悪である、  
と言われて育ってきたのです。

そのため、人間の男との性行為を否定しなければなりません。

しかし、人間である女性は男を本能的に求めていきます。

誰しも人間の本能的性欲を死ぬまで抑圧し続けることはできません。

毎日、無意識に罪にならない行為を求め、

地獄のような世界で、もがき、苦しみ、やつれていくのです。

人間は彼女たちを地獄から救い出すことはできません。

彼女たちを救えるのは、唯一、神の男、すなわち教祖です。

神の男との行為は罪にはなりません。

したがって、彼女たちは神の男である教祖との行為によって、  
地獄から脱出するのです。

さらには、神である教祖との行為によって神の子を産むことを望んでいきます。

神の子を産むことは、この上ない至福をもたらすのです。

また、神の子の母になることは神に近づくことにもなるのです」

ドクターは講義でもするように淡々と述べた。

「僕にはよく理解できませんが、僕はどうすれば？」

「今は、警察に任さなければなりません。

もし、教団に誘われるようなことがあれば、私に連絡いただきたい」

「わかりました」

ドクターはこの件に関して誰かに依頼されているのか？

「診察の時間なので、先生も病室を覗かれますか？」

「いや、結構です。失礼させていただきます」

拓也は患者に出くわさないよう、逃げるように病院を後にした。

## 九

今日は中学生の達也君の件で、今つき合っている瞳が来る。

瞳は近所に住んでいた幼稚園からの幼なじみ。

6年前、3年に一度開催される世界数学会議が奈良で開催された。

拓也は大の親友であるシルベスター博士と奈良公園で鹿に餌をやっていた。

そのとき、偶然、20年ぶりに瞳に再会した。

女神のいたずらか？

その再開が新しい人生の第一歩となった。

もう、そろそろやってくる。

「タクヤ、いる？」

弾む女子高生のような声。

「暑かっただろう」

この暑さで瞳の胸の谷間から汗が噴出している。

「もうだめ！」

服を一気に脱ぎ、バスルームに飛び込む。

「タクヤ、心配だわ。近所で下着泥棒が出たって言うの。

達也だったらどうしようかと思って」

「知り合いに精神科医がいるんだが、彼が言うには心配ないそうだ。

性的興味は自然だとさ。ほっといていいんじゃないか？」

拓也はシャワーの音で瞳の声がはっきり聞き取れなかったが、

シャワーの音を打ち消すように大声で返事する。

「そうね、だといいいんだけど。麗子のこともあるの」

瞳はバスルームから出ると、奥の部屋で着替えながら大声。

「え、麗ちゃんのこと」

「そうなの、アルバイトしてるみたいなのよ」

瞳は水玉のワンピースに着替えると、キッチンに跳ねてやってくる。

「アルバイトぐらい、いいじゃないか」

拓也は缶の野菜ジュースをグラスに注ぐ。

「それが普通じゃないのよ。

お小遣いでは買えないような、かなり高級なブランド品を持ってるのよ」

瞳は冷蔵庫から缶ビールを取り出す。

「おいしいわ、夏はビールね。タクヤは？」

「やめとくよ。昨日、飲みすぎちゃってね」

拓也は野菜ジュースで喉を潤した。

「変なアルバイトしてなきゃいいけど」

「気にしすぎじゃないか？」

「お小遣いはちゃんとあげてるのよ。お金に困るはずないんだけど」

「麗ちゃんはしっかりしてるから、心配ないって」

「麗子も女よ」

瞳はビールを一気にグラスに注ぐ。

あっという間にビールの泡はテーブルまで流れ落ちた。

「今の子は、ロボと張り合っているからな」

今では人間女優よりロボ女優のほうが売れている。

「まさか、あの時の私と同じことやっているんじゃないかって」

「同じことって？」

「例の女優業よ」

瞳はゴクンとビールで喉を鳴らす。

「まだ、はっきりしたわけじゃないし、考えすぎじゃないか？」

「だといんだけど。親としては、やってほしくないの。虫がいいようだけど」

「僕には女性の気持ちはわからんよ」

「麗子には普通の恋愛をして、普通の結婚をしてほしいの」

「あ、そう」

「タクヤも、6年前、女優のこと打ち明けたとき、軽蔑したでしょ」

「瞳を軽蔑なんか、するはずないじゃないか」

「なぜだかわかる？女優やったの。タクヤが捨てたからよ！」

「ちょっと待てよ。捨てたんじゃなくて、離れただけじゃないか」

「同じことよ。タクヤに見せたかったのよ。ウーン、はっきり言って、嫉妬させたかったの。数学しか頭がないんだから。バカ！」

「僕はおくてだから・・・昔のことはよそう。

不思議だな、いつの間にかこんな関係になるとは。赤い糸で結ばれていたのかも」

「だけど、幸せだわ。過去はどうでもいいの。

今、タクヤがいてくれるから。タクヤ、食事済んだ？」

「ああ。夜はどうしようか？食べに行ってもいいけど」

「つくるわ。元気が出るもの買ってくる。6時に戻れるかも」

瞳は服を着替えると、時間を気にしているかのように飛び出して言った。

女優と瞳が言ったとき、記憶が鮮明に甦ってきた。

初めてDVDを見たのは大学4年の時。悪友が誕生日のプレゼントにくれた。

DVDのジャケットには、純白のウェディングドレスの少女。

中央に黄色い文字で書かれた「夢見る乙女」。

右上には赤い文字の人間女優・早乙女 愛。

ロボ女優より、人間女優のほうが値段が安い。

拓也はケースからDVDを取り出すと、そっとトレイに入れた。

瞬間、目を疑った。目の前にいるのは瞳だった！

「え！瞳？まさか、似ている、確かに似ている」

とっさに拓也は画面に声をかけると、呆然と映像に見入った。

拓也がこのDVDの女性が瞳であることを知ったのは、今から6年前。  
瞳と奈良で再会したとき、拓也は浦和のお店のことを知った。  
自分から瞳に会うのは、律子を裏切るようで躊躇したが、  
会うことを実行する決意が心の底で芽生えていた。  
律子に出張の話をした拓也は、メモに記された「スナックヒトミ」  
第一カトレアビル3Fの住所に向かった。

銀色文字の「スナック\*ヒトミ」を確認すると、静かにドアを開けた。  
中は薄暗く静かで、右手のソファではサラリーマンと思われるお客が7, 8人。  
ホステスたちと楽しそうにペチャクチャ。  
カウンターに目をやると、ヒトミがカウンターの客にグラスを手渡していた。  
拓也に気づいた15, 16歳と思われる赤のドレスのホステスが、  
「いらっしゃいませ」と明るく声をかけた。

条件反射のようにドアのほうに顔を向けた瞳は、  
驚きを隠した笑顔で口を少し動かした。  
「タクヤ！」  
声はかすかであったが、あの懐かしい女子高生の声。  
「やあ」  
拓也は足元を気にしながら、カウンターの席につく。

「すぐにわかったでしょう」  
化粧は大人の瞳をつくっていたが、笑顔は少女のときと同じ。  
「ああ」  
拓也は学生のように軽い返事。  
「奥があいているわ」  
瞳の甘い香水は、拓也を奥のテーブルに誘う。

拓也はより薄暗いテーブルのソファに腰を落とす。  
肌を感じるほどに近くにいる瞳。  
瞳の笑顔がキャンドルライトに浮かぶ。  
瞳は膝で喜びのサインを送りながら、  
白い手に包まれたグラスをそっと正面のコースターの上に置く。

「瞳がこんなに近くにいるとはね」  
女子高生とまったく同じ笑顔は、瞳への気持ちを活火山のように爆発させた。  
「ほんとね！」

「明日、会わないか？」

勝手に瞳の手を握ろうとした右手を急いで左手が止める。

「そうね、明日は休みなの。それじゃ、駅前のコスモクラシックに来てよ」

少女のような弾む声。

「ほら、駅前にあったでしょ。パチンコ屋よ。12時ころ来て。88番でやってるから」

「僕はやんないよ」

「12時には引き上げるから。ね、タクヤ」

拓也の手を軽く握る。

翌日、拓也は浦和駅裏のビジネスホテルを10時30分に出る。

駅のエレベーターで3Fに上がり、パチンコビルへの通路を歩く。

パチンコビル3Fはゲームセンター。

子どもたちが意味のわからない言葉をしゃべっている。

2Fにエスカレーターで降りると、ルパン三世が大きく描かれたドア。

自動でドアが開くとロックとジャズをアレンジしたような爆発音。

人間の店員はいない。カウンターにロボ3台。

キョロキョロと瞳を捜す拓也。

「88・・・」つぶやきながら番号を目で追う。

拓也は列の中央まで歩き足を止める。

「よう！」

瞳の肩に軽く手を置く。

「見て！134029個よ！」

瞳はデジタル表示を指差すと、緊張した顔つきでピンを見つめている。

「そいじゃ、入口のところで待っているから。早めに頼むな」

拓也はコーヒーを飲むことにした。

「いいわ、もう潮時だわ」

拓也に笑顔を送る。

拓也は入口のカウンターでコーヒーを飲みながら辺りを眺めていた。

10分ほど待つ。カワイイおへそが目に飛び込む。

丈の短いブラウンのシャツを着た瞳。

笑みを浮かべレゲエを踊りながらやってくる。

あのところとまったく同じ。



「タクヤ、ごめん、お待たせ。しっかりおごるから」

「瞳、勝ったみたいだね」

「たまにはね」

瞳は500ドル札を5枚、自慢げに大きな胸の谷間にはさむ。  
二人は大通りに出るとあたりを見渡す。

「タクヤ、何食べたい？」

「何にしようか」

「そいじゃ、パスタにする？チョー人気の店に行くとすっか」

「いいね！」

二人は高校生のときと同じ会話。

パスタ店の入口の前には若いカップルの長い列。

「多いな、やめとくか」

「そいじゃ・・・隣のレストランに入る？」

レストランボンジュールに入ると、二人は奥の日の当たらない席に座った。

拓也は瞳の今の仕事が気になった。

切り出す言葉に戸惑ったが、何気なく聞くことにした。

「今の仕事、長いのかい？」

「別れて、それから。タクヤこそどうしたのよ」

「僕は主張さ。まあそういうことで」

「それって、バレバレじゃない」

瞳はあきれた顔。

「今、別れたって言ったけど」

「自業自得ってやつね。5年で破滅しちゃった」

瞳は窓に視線を向ける。

拓也の気持ちを察したように、ステーキが運ばれてくる。

「おいしそうだね」拓也はナイフとフォークを手にする。

「コレって、ロボがステーションで創った肉よ。

ロボ肉もここまでおいしくなると、地球の牛さん、安心ね」

瞳はレアで焼かれた肉を切り取ると大きな口に放り込む。

「うまい。本物以上だ」

拓也は笑顔で味わう。

「ロボって、何でも創っちゃうのね」

瞳は感心しながら、あまりかまわずに飲み込んでいる。

「ああ、さすがだね！」

拓也は豪快に食べる瞳の口を啞然と見ている。

瞳は赤ワインをグイッと半分ほど流し込むと、拓也の顔をしばらく見つめうつむく。

「奥さん、きれいな方でしょうね」

「いや、なんと言うか。まあ」

「タクヤ、子どもは？」

「一人、娘がいるよ。ヨシエと言うんだ」

「こっちは二人よ。女と男。レイコとタツヤ」

瞳は話し終わると、すぐに口を大きく開けて肉を押し込む。

「女で一つで、大変だね」

「そうでもないわ、母がいるから。タクヤ、浦和に主張ってことはないでしょう。

奥さんと喧嘩したんでしょう。顔に書いてあるわよ」

「女の勘にはかなわないな。喧嘩じゃないけど、羽をのばしたいだけさ」

「あら、きれいな奥さんがいるのに」

「どうだか、歯ぎしりがひどいんだぜ」

「そんなに。拓也って、女運が悪いのかしら。私を捨てたからよ」

「昔の話はよそう。明後日、帰ることになっているんだ。今夜、どう？」

「誘ったりして、後悔するわよ」

瞳はハンカチを取り出すと、笑顔で光る胸を拭く。

「ところで、瞳こそ、なぜ別れたんだよ」

自分の話をこれ以上したくなかった。

「それはいえないわ。ダメよ」

瞳は顔をすばやく左右に振ると、切ったばかりの肉を放り込み、  
黙々と食べる。

「幼なじみの仲じゃないか、隠すなよ」

「DVD」

瞳は、小さく、かすれた声で拓也だけに聞こえるように口を動かす。

「わかるように言えよ」

拓也はむっとなりならみつける。

「怒らないでよ、怖い顔。20歳のころ、女優をやってたってこと」

瞳はグラスに残っていたワインを一気に空ける。

「例の女優か？」

「そう。びっくりしたでしょ。それが亭主にばれたってわけ」

拓也はしばらく黙っていた。

今までDVDでたびたび見ていた女優は、やはり瞳であった。

拓也の頭の中はDVDの瞳でいっぱいになった。

「がっかりしたでしょう。まあ、こんな女なの。

なんだか、寂しくなっちゃた」

「伊豆にでも行こうか」

拓也は高校時代の瞳を誘っていた。

「そうね……いいのね！」

瞳の笑顔は、高校時代、遊園地で遊んでいたときと同じ。

「車を飛ばせばすぐだ。だけど、家の方は？」

「母に電話するわ！」

二人は高校時代に戻っていた。

瞳とは幼なじみであり、妹のように接していた。

東京に出るときも、妹と別れるような気持ちで奈良を去った。

当時、瞳は意味のない理由で東京の大学をけなしていた。

また、なぜ京都の大学に行かないのか、しつこく言っていた。

瞳は東京に就職できないことを口惜しく言っていたが、

拓也は瞳が言いたいことを察知できなかった。

拓也の頭にあるのは数学だけ。

「必ず、夏休みには帰ってきてよ。いい？  
タクヤ、電話もよ。約束よ。待ってるから」  
このとき、瞳はすでに女性であった。  
拓也は話すこともなくて電話する気になれなかったが、  
瞳は毎日のように電話をかけてきた。

瞳は意味のわからないことを長々と話しては、一方的に切っていた。  
しばらくすると、かけてこなくなった。  
このときは、瞳を一人の女性と見ることができなかった。  
拓也が瞳を女性として感じたのは、DVDを見てから。  
心の底では瞳を愛していたのだろう。

「温泉は何年ぶりかしら。すてきだわ、この眺め。タクヤ、来て！」  
瞳の笑顔は子どものころ、公園で鬼ごっこをしていたときとまったく同じ。  
「ああ、やっぱし、来てよかった！」  
「俺もだよ」  
「タクヤ、瞳が幸せにしてあげる！」  
拓也の右手を両手でしっかり掴む。

「俺って、ドンくさいよな。今頃になって気づくとは」  
「いいの、これも女神が与えた試練なの。拓也も瞳も、  
他の人を経験したからこそ、二人の愛が見えたの。  
きっと、本当の愛が生まれるわ。信じてたの、今日が来る日を。  
うれしいわ、本当に幸せ！」  
瞳は拓也の右手の甲をふくよかな胸に押し当てる。

ドアを開ける音がした。ロボ仲居が挨拶にやってきた。  
日本人系美女、かなり色っぽい。  
「失礼します。本日はようこそお越しくださいました。浴衣はこちらにございます。  
食事は7時になっております。ご指定がございましたらおっしゃってください」  
「ちょうどいいじゃないか」

「何かございましたら、電話でお申しつけください。お風呂は岩風呂で、  
お肌がつつるになる温泉です。きっと気に入っていただけると思います。奥様！」  
仲居は丁寧な言葉遣いで瞳に向かって言う。  
ロボ仲居は、人間以上に美しい日本語をしゃべる。

「すてきだわ、ここまで来た甲斐があったわ。ねえ、あなた」  
「ああ、そうだね」  
「ごゆっくりなさいませ」  
ロボ仲居は丁寧にお辞儀すると、静かにドアを閉めて消えた。  
「奥様だなんて」  
瞳は子どものように、ニコニコしながら浴衣を渡す。  
二人は岩風呂に向かう。

二人が風呂から上がると、ロボ仲居が食事の準備をしていた。  
「お食事の準備は整いました。お飲み物をお持ちいたしましょうか？」  
「ビールを1本とブランデーをボトルでお願いします」  
「あら、ステキなお料理。日本酒もお願い。2本ね」

瞳は仲居にチップを渡す。ロボ仲居、丁重にチップを受け取る。

仲居がドアを閉めると、拓也は少し腰をずらし、妖艶さを増した浴衣姿の瞳に近づく。

「ブラ、外して」

拓也に背中を向けると、浴衣の襟はストンと落ちる。

拓也がぎこちなくホックを外すと、瞳はブラをテーブルの下に放り込む。

瞳の透き通るうなじに見入っていると、ロボ仲居の澄んだ声がする。

「お飲み物、お持ちいたしました」

ロボ仲居はやわらかい腰つきで飲み物を置くと、

深くお辞儀をし、甘い香りを残して消えた。

瞳は二人のコップに勢いよくビールを注ぎ、一つを拓也に手渡す。

「はじめましょ、タクヤ、カンパーイ！」

瞳は一気にグラスを開ける。

「タクヤ、日本酒は？」

「日本酒は勘弁してくれ。ダメなんだ」

「酔いたいときって、日本酒がいいの。とてもいい気分！二本、飲んじゃうわよ」

「かまわんよ、強いんだな」

「おいしそうだわ、タクヤ、これ食べて」

タイの刺身を拓也の口元に運ぶ。

「何か嘘みたいだな。こんなところに、二人がいるなんて」

瞳の手を握り、口に含んだブランデーを流し込む。

「今、とっても、幸せ！」

瞳はまぶたを閉じてささやく。

瞳の甘い香りとブランデーで、拓也の心は芯までやわらかくなっていた。

突然、頭の中にDVDの瞳が現れた。

「DVDなんだが・・・」

口がひとりでに動いた。

「DVDがどうしたの？」

「いや何も」

「タクヤはDVD見たことあるの。まさかね」

「いやあ、ちょっと。学生のときに」

「うっそー・・・アーベル大生が。イヤー・・・タクヤったら、エッチなのね。  
まさか瞳を見たなんていわないでしょうね」

「チョット似ていたものだから。いや、まあ」

「ヤー・・・恥ずかしいわ、ハハハハ・・・モーイヤ」

太鼓でも叩くように、拓也の右肩を叩いた。

拓也の口からタイの刺身が飛び出した。

「いや、ちょっと、あの」

完全に酔った口は勝手なことを言っていた。

「だけど、ハハハハ、うれしいわ。あのころの瞳を見ていてくれて。

もう、おぼんだもの」

と言ったとたん、気絶したように拓也の膝に顔を落とした。

「酔ったみたい。あ、ダメ、しっかりしなくっちゃ」

瞳は何かを思い出したように急に起き上がる。

「おいしそうな天ぷらが残っているけど、どう」

拓也はえびの天ぷらを指差す。

「いいわ、脂っこいのは苦手なの。お茶漬け、いただきますよ」

瞳はすばやくお茶づけの準備をする。

「タクヤ、酔っちゃダメよ！」

ルルルル・・・電話の音が拓也の酔いを醒ましてくれた。

「はい、お願いします」

拓也はロボ仲居からの確認の電話に応える。

「床の準備をしてくれるとさ」

拓也の言葉は瞳には聞こえていないみたい。

「お風呂に入りましょ。タクヤ、酔い、醒ましてね」

瞳は拓也を置いて風呂に向かう。

部屋に戻ると、二つの枕。

「瞳、冷えるんじゃないか」

声をかけたが、瞳はベランダで遠くを眺めている。

拓也も潮の香りを求めてベランダの椅子に腰掛ける。

「気持ちいいなあ…」

「タクヤ、あの空見て！」

瞳は時間を越えた空を見つめている。

「きれいだね」

「茜色の空、ほら、中学生のころ二人で見た空！

あ、そうだ、家の近くの公園で、話したこと、覚えてる？」

「なんだっけ？」

「夢よ、二人の！タクヤはなんと言ったでしょ？」

「たぶん数学者になりたいと言ったんじゃないか」

「あら、タクヤったら、フィールズ賞を取りたいって言ったのよ」

「よく覚えてんな」

「瞳はなんと言ったでしょう？」

「自分のことも忘れてるのに、瞳の夢を覚えているわけないよ」

「今考えると、恥ずかしいこと言ってたの。タクヤのお嫁さん！」

瞳は両手で顔を隠す。

「そうだったかな。僕はがきだったからな」

「今日、夢がかなうのね」

瞳はメルヘンモード。

「まあ・・・そうだな」

「本当に生まれてきてよかったわ」

瞳は万歳をしてジャンプ。

「冷えるぞ」

タクヤは瞳の両肩に手を当て、部屋に誘う。

「灯り、小さくして」

瞳は先に横になり、目を閉じた。

浴衣の中には、シルクのように滑らかな肌、

麻酔薬のようにすべてをえ忘れさせてくれる甘いバラの香り。

すでに時間は止まっていた。

そっと二つの白くて甘い桃を唇で味わうと、

バラの花と蜜で作られた真っ赤な唇に、今までの思いを重ねた。



拓也は目を閉じた瞳の優しい表情を見つめ、  
ゆっくりと瞳の肌にとけていった。

「ただいま！」

瞳の明るい声！瞳との再会の映像は一瞬にして拓也の脳裏から消えた。

「勝ったみたいだね」

パチンコで勝ったときのいつもの笑顔。

「うれしいわ、タクヤが私のこと、すぐにわかってくれて」

瞳は買ってきた荷物をテーブルの上に勢いよく落とす。

「大丈夫かよ。割れるぜ」

「はは・ん、タクヤったら、何買ってきたかわかったな。

パックに入っているから大丈夫。今夜はお蕎麦よ。

見て、タイの刺身、うずらの卵、天然の山芋、精が出るわよ！

シャワー、お先にどうぞ」

言い終わると、奥の部屋に駆け込んだ。

夕食ができるのを待っている間、タクヤは絵本を描いていたが、  
テーブルの隅に置かれていた包みが気になっていた。

「夏は蕎麦に限るな。これは？」

テーブルの隅に置いてある包みを指差す。

「これ、まだ見ないで。それじゃ、いただきますーす。タクヤ、ビールは我慢してね」

「わかっているよ」

タクヤは包みが気になり口を動かしながら瞳の右隅に目をやる。

「何だよ、これ？」

「待って、後で見せてあがるから。山芋どう。タイおいしい」

「ああ、うまい」

包みが気になって、気が抜けた返事。

拓也は食べ終わると、ブランデーを飲みながら、

瞳の食べ終わるのを待った。

「元気でた！」

瞳は最後のビールを飲み干す。

「ああ」

拓也は書齋にロボ開発情報誌を取りに席を立つ。

「絵本、どう？うまくいってる？」

「もう、かなり出来上がったよ。瞳のおかげだよ」

「早くできあがるといいね。チョット見せて」

瞳は両腕でリズムをとりながら、書齋に跳ねてやってくる。

「あら、かわいい！かわいい！～女神からの不思議なプレゼント～  
きっと、子どもたち喜ぶわ」  
「思い切って、やってよかった。新しい目標ができたし、瞳のおかげだよ」

瞳はキッチンで洗い物を片付けると拓也を呼ぶ。

「開けて！」

包みを拓也に手渡す。

「何だよこれ、からかうなよ。バレリーナの愛、今月の新人、愛沢聖子」  
DVDを手にした拓也はしばらく草原で宙を舞うバレリーナを眺める。

「もう、わかるでしょ」

「まさか？」

「その、まさか！念のためにDVD買ってきたの」

「そうか、この子が麗ちゃん。あのころはまだ子どもだったからな」

「タクヤ、いつまで見てんの。タクヤが言ったように、何も言わない」

瞳は拓也の手からすばやくDVDを取り上げる。

## さやかとアンナ[1]

<http://p.booklog.jp/book/37188>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37188>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37188>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.